

身延・池上間撃鼓行脚紀行

弘安五年九月・大聖人が身延より池上へ向われた道、それは七百年の草に深く埋れて、跡さえ定かならず、遺跡を訪ねる人すら今は少い。醒悟園本妙庵に学ぶ我々鷲峰会学生三名は学校休暇中、撃鼓してその跡をたどった。或は道に迷い、或は道に涙しながら、この道ぞ祖道復興の道と祈りをこめて……

この行脚紀行の掲載に先き立って

日蓮大聖人が何故身延を出て

池上へ向われたのか

まず、その理由をたずねてみよう

日蓮大聖人の

身延出山の真意

日 高 白 象

弘安四年（一一八一年）の七月、博多湾頭に来襲した蒙古の大軍は一夜の暴風雨のため玄海灘の藻屑と消え、さしもの国難もこゝに去った。

国民は安堵した。大聖人もはじめて、三間四面の草庵生活を打ち切り、十間四面の本堂建立を許した。同年十一月二十四日、弟子・檀越の丹誠によつて見事本

堂が落成した。

大聖人はこの寺に妙法華院久遠寺と命名された。

然し大聖人の御健康は、立教開宗以来三十年間、打ちつづいた法難迫害のため、甚しく害されていた。

翌る弘安五年九月八日、大聖人は波木井の領主南部六郎実長公の献上した栗鹿毛の馬に乗られ、数名の弟子檀越に守られながら、九ヶ年の間、住みなれた身延の山をあとに、故郷房州へと向われた。

旅の目的は、既に亡くなられた両親のお墓に詣で、かたわら常陸の湯で

病状回復を計るものではあったが、心中ひそかに

死期の迫るのを予期されて、父母の墓前に最後の孝情をのべ、且つは国難後に来る国家状勢の変動をつぶさに見て、正法宣布の対策を未来に立てんとする気構えもあられたことであろう。

この気構えについては、国難後の政権が、やがて鎌倉より京都へうつることを達観された大聖人が池上御入滅の真際、年十四才になる少年経一磨(後の龍華日像上人)に対して、京都開教を御遺命さ

れたことによっても推量されよう。

これまで日蓮門下の内に伝えられている大聖人の身延下山、そして関東へ向われた理由としては、御両親のお墓詣でと、常陸での湯治(そこは加倉井温泉ではなかったかとも言われているが)、それともう一つの大事な理由として、

―身延よりウシトラに当る池上の地を死に場所と定めるため―

ということが挙げられているが然し、そのいずれにしても個人的な理由

にしかすぎない。

思えば大聖人の身延入山は、個人的な隠棲ではなく、有史以来未曾有の大國難が眼前に迫り、しかも最後の國家諫曉にも入れられなかつたものであつたればこそ、最早この國難を一身に背負つて仏天に祈るほかはなく入山された、國家的見地に立つものであつた。

― 急ぎ身延の山を走り出で、火をくゞり水をくゞつてでも、恩師の墓前に到り、報恩のお経の一巻をあげたもの―
と、心ははやりながらも、敢てその心をおさえて、一步も身延の山より出なかつた所以のものも、― 大悪は大善の来る前兆―
― として、大悪國難終結の後に、いよいよ大善法華経が広宣流布する時が来る、という國家的見地に立つていたからである。

な、三間四面という手狭な草庵に起居されていたのも、ひとえにこのためであつた大聖人が、親のお墓に詣でるためとはいへ、或は御自身の病氣湯治とか、死地を定めるためとはいへ、そうした個人的理由で身延を出られるはずはあり得ない。
そこには必ず、國家的見地からみる重大な理由が、秘められていなければならぬ。それは、國難後に惹起して来るであろう國家あげての大變動を、大聖人みずから足で確かめ、肌にも感じて、しかと見きわめ、この変

動の後に来る正法宣布の

九月九日大井莊

(静岡県駿東郡小山町竹ノ

未来を達観して、みずか

(山梨県南巨摩郡鯉沢町蓮

下常唱院―鈴木繁八郎趾)

らの死期が迫つておれば

華寺蓮久寺―大井橋六郎

九月十五日 関本

こそ、門下の人々に滅後

趾)

(神奈川県足柄郡南足柄町

の方策をさずけておく、

九月十日 曾根

雨坪弘行寺―下田五部左

という方針であつたので

(山梨県東八代郡中道町上

衛門郎趾)

はないか、と推量するほ

曾根妙石庵―曾根治郎正

九月十六日 平塚

かはない。

晴郎趾)

(神奈川県平塚市平塚町要

おそらく大聖人は、こ

九月十一日 黒駒

法寺―長谷川郎趾)

うした重大目的を胸中に

(山梨県東八代郡御坂町下

九月十七日 瀬谷

秘して、身延を出られた

黒駒―岩間宣計宅)

(横浜市戸塚区瀬谷町一ノ

ことであるう。池上への

九月十二日 河口

関妙光寺―明光庵趾)

道中、宿泊された所は古

(山梨県南都留郡川口湖町

九月十八日 池上

い記録に次のように記さ

―渋江因幡上ノ坊―梅屋

(東京都大田区池上本町本

れている。

宅趾)

門寺―池上宗仲郎趾)

九月八日下山

九月十三日 呉地

その足跡は、富士山を

(山梨県南巨摩郡身延町下

(山梨県南都留郡西桂町上

中心として、その西側を

山本国寺―下山光基郎趾)

呉地―遠山藤学郎趾)

廻り、河口湖畔を過ぎて

足柄峠を越え、小田原の上流の関本より酒匂川を渡り、松田・秦野を過ぎ、

平塚、瀬谷を通って、多摩川の丸子の渡しで、池上宗仲兄弟をはじめ鎌倉在住の一門に出迎えられ、洗足池を経て、池上の邸には午の刻(午後一時)に到着されている。

その旅程は、前後十一日間も要しているが、それは文永十一年五月十二日鎌倉を発って同十七日身延に到着された身延入山の折の、前後六日間の日数にくらぶれば、およそ倍もかゝっている。それは、おそらく大聖

人の御健康が著しくそのなわれていたゝめであるう。

事実、大聖人は池上に着かれた翌九月十九日、さつそく身延の南部実長公へお便りを書こうとされたものゝ、筆を持つ力もなく、弟子日興上人に口述代筆せしめ、せめて最後に判形といつて書判をしたゝめようとされながら、その力すらなく、

所労の間

判形を加えず候こと
恐れ入り候

と口述代筆せしめておられるほど衰弱されていた。そして、それより一

月もたゝない弘安五年十月十三日の午前八時頃、大聖人は池上の邸において御入滅されたのであるが、それほど衰弱しておられるお体でありながら、敢て身延山を出て関東へ向われた大聖人の心中を思えば、国難後の日本国の行く末を憂う大聖人の、護法憂国の至情が、ひしひしと胸に迫り来るのを禁ずることは出来ない。

池上行脚の目的

編集部

目下、波木井山頂の醒
悟園本妙庵には、日高白
象上人を中心として、昭
和三十九年の春身延山大
学を卒業した鷲峰第一期
生の沢田覚象君(京都府出
身)、同第二期生の小林白
峰君(福島県出身)をはじめ
め身延山大学一年の渡辺
政彦君(兵庫県出身)、身
延山高校三年の仲清蔵君
(大阪府出身)、同じく高
校二年の浅見行俊君(京都
市出身)の五名が異体同心
となつて行学にいそしん
でいるが、まだ沢田君や
浅見君の来園しない昨年
の六月の頃、

大聖人が池上へ向われた
弘安五年の聖路をたどつ
て撃鼓行脚しよう」
と申しあわせた。
その目的の第一は、大
聖人の足跡をたどること
によつて、祖道復興につ
らなるということ。第二
には、その道を歩かれた
時の大聖人の心底にふれ
るということ。そして第
三には、七百年前の聖路
が、深く草に埋れ、今や
忘れ去られようとしてい
る今日、出来る限り史実
に忠実に歩くことによつ
て、道順を明かにすると
共に、道中の遺蹟をさぐ
り、これを顕彰する一役

をもになうということであつた。
もちろん道中には、幾
多の苦難が予想された。
然し、苦難こそ買つても
出るべき修行である。
思えば身延山学生布教
別動隊が今日全国各地に
街頭布教を展開しては、
大いなる成果をあげてい
るが、その起りというも
のは、昭和三十七年の夏、
数名の学生有志が日高上
人と共に、身延より鎌倉
へ所謂文永十一年五月大
聖人が身延入山された聖
路、これを逆にたどつて、
更に池上から東京まで行
脚し通したことに始つて

「今度の暑中休暇には、

いる。

爾来、別動隊は休暇ごと
に休暇を返上し、街頭
に撃鼓宣令、民衆に獅子
吼して、その布教は誠に
華々しかった。

然し冰山にしても、洋
上の部分の何十倍のもの
が、水中に深くかくされ
ている。

布教もまた、かくの如
くあらねばならないので
はあるまいか。華々しい
布教成果のかけには、人
知れぬ地味な布教の積み
重ねがなければなるまい。

かえりみれば文永十一
年の身延入山の聖路をた
どって行脚した日蓮門下

青年僧の試みは、独り鷲
峰会のみならず、過去幾
度か行われたと伝え聞い
ている。

然し、弘安五年の池上
への聖路をたどる行脚を
試みた話しは、絶えて聞
いたこともない。

それだけに今度の決行
には、より一層の意義を
覚えずにはおられないも
のがあった。

我々は決行を決意する
や、直ちに準備にかゝつ
た。準備の第一は大聖人
の歩かれた道を、出来る
限り忠実に歩くため、そ
のコースを確認しておく
ということだった。

五万分の一の地図をひ
ろげては研究した資料に
もとずいて、コースに赤
線を入れて行つた。

然し、その赤線も、全
行程の三分の一しか入ら
なかつた。何となれば、
聖路を裏付ける資料は少
く不明の点が多かつた、
めである。

かくなる上は、現地に
到つて踏査するほかはな
い。

と思つている中、暑中
休暇がやって来た。身延
山布教本隊は直ちに京都、
大阪へと出動し、つゞい
て別動隊は名古屋、瀬戸、
小牧、一ノ宮、津島、七

宝方面へと連日街頭布教を展開した。身延に帰山したのは七月二十三日の夜のことだった。我々もその中の一員だった。

本妙庵に帰って、一週間に亘った関西、中京地区布数の疲れをいやすと共に、池上行脚コースの最終的机上復習を試みた。これには二日もかゝった。そして七月二十六日、よいよ壮途についたのである。以下、日程に従って、行脚の記録を紹介してみよう。

身延山より御殿場へ

小林白峰

七月二十六日 晴

小林・渡辺・仲の一行三名が、日高上人に見送られながら墨染の衣に手甲脚絆、網代笠に頭陀袋、尺三の太鼓を撃つて、本妙庵を出発したのが夜明け前。

黎明、祖廟にぬかずき、行脚の所願成就に暫し祈念をこらし、本山へ登つて、法主猊下をはじめ山務役職員に挨拶。激励をうけて山門を出発したのは、早くも九時をすぎた。

一行はわずかに三名。

太鼓は三本。然し擁護の仏天、我が頭上にありと思えば、決して淋しくも心細くもなかつた。門前の人々の盛んな見送りをうけ、東谷から旧甲州街道に入った。

新宿(しんしゆく)の部落をすぎる頃、清正公堂があり、こゝより遙かに本妙庵の台地、禅定窟の森をおがみ、間もなく「旭の御祖師さま」というお堂の前に出た。

こゝは文永十一年六月十七日、大聖人が波木井の城を未明に出て西谷の御草庵へ向われる途中、

東天に旭の昇るのをおがまれた所と伝えられ、内陣の祖師像は、珍らしくも立像で勧請されていた。

あたりには大きな技垂桜や老松がそびえ立ち、無住のお堂の人気もない



御廟所より出発する行脚隊

境内には、鳴くセミの声ばかりかまびすしく、神気のたゞようものさえ感ぜられた。

この街道は県道に編入され、近く幅六メートル五十のバス道路となり、身延の裏参道として発展する予定であるというが、今は人気もないこの街道をたどり、一里松杉山の部落を経て国道に出、下山町の本国寺に詣でた。こゝは下山の領主、下山兵庫五郎光基のいた所である。文心元年夏の頃、領内に疫病が流行した、め光基は、邸のそばに平泉寺を建立、かねて信仰

していた阿弥陀仏を勧請し、除厄の本尊とした。

光基の子に四郎という子がいた長じて出家し、因幡(いんば)房と称し、比叡山に遊学中、最蓮房と親交があった。

後年、因幡房が最蓮房に邂逅した時、既に最蓮房は大聖人の門弟となっており、旧交を温むる間、因幡房は法華経の本義をさとされ直ちに身延山西谷の草庵に大聖人をたずね、爾来、念仏をすて、法華経に帰依し、お題目を高唱するようになった。父光基はこれをなじった。因幡房は大聖人にこ

の旨を計った。そこで因幡房に代つて大聖人みずから一書を綴り、光基に呈して捨邪帰正の本義を開陳せしめた。所謂「下山陳状」または「下山御書」というのが則ちそれである。

光基は、この書によつて豁然大悟し、翻然として旧執をすて、法華經に帰依し、受戒して法重房日芳という法号をさずかり、同時に因幡房も日永という名をたまわつた。

同時に平泉寺が本国寺と改称して、法華の道場となつたのはいうまでもないが、時に建治三年六

月のことだつたという。

寺宝としては山梨県文化財に指定された磬(けい)とか、大聖人が最蓮房へ与えられたと言ひ伝えられる撰法華經を、身延十五代宝蔵院日叙上人が書写されたものとか、同広中師が書かれた数点のもの等々が格護されていた。

最蓮房日浄上人については、歴史的に実在したかどうか、学説区々としているが、本国寺では開山として仰がれており、伝えるところでは最蓮房が、その晩年、本国寺に起居して、身延の大聖人に師

事したともいわれている。

最蓮房に関する史実については更に研究を要するものが多いが、然し弘安五年九月八日、関東へ向われる大聖人が、身延出立の第一夜を光基の邸で過された、ということは確かなところである。

おそらく大聖人は、日も明い中に到着され、光基に乞われるまゝに法門のことを説き明かされる中ついで時のたつのも忘れて、一泊されるに至つたのであろう。

なお下山の霊場上沢寺の古記録によれば、光基の邸は今の城山という台

地にあつたらしく、大聖人は恐らく、その城山に一泊されたのではあるまいか、という説もある。

住職は身延山大学教授の秋山智孝先生。恩師であるだけに心安くこれよりにたどる大聖人の池上聖路について、種々御指導をうけた。

それによれば、大聖人の歩かれた道は、今の国道筋ではなく、本国寺より裏手の山道をのぼり、南松院というお寺のところで、二手に分れる道を右にとり、上栗倉と栗倉の部落をすぎて、国道の早川橋へおりのコース、

ということだった。

道幅は三尺ばかりの、稀にキコリしか通らない草深い山道、

「判りにくいだろうから……」

と、わざわざ一人の信者を案内につけてくれた。おかげで道に迷うこともなく、栗倉部落へついたのは午後の二時半。

宗光寺という日蓮宗寺院に参拝し、部落をすぎて遅い中食をとりけわしい下り坂をおり切ったところ、七面山参拝の折に通り返した早川橋のすぐそばだった。

早川橋を渡ると、橋の

たもとで道は二つに分れる。右は甲府へ行く国道、左は早川の川ぞいに上る九尺道路、旧道はこの山道である。

山道は、ほどなく早川の河淵より離れて山間へ入り、遅沢(おそざわ)、中山、矢細工(やさいく)、川平、平須(ひらす)、久成(くなり)、大塩、鳥屋、雨久保狩宿、仙洞田という山間の小部落を糸のように縫って、小室(こむろ)山妙法寺に達している。

日蓮大聖人が歩かれた道も、おそらくこの旧道であろう。そして大聖人を毒殺しようとした小室

の修験者善智法印もまた、この道をつたって身延へ行ったことであろう。

我々一行は、この山道をめざした。そして夜遅くなっても小室山まで、たどりつきたいと思った。中山部落に入ったのは午後三時すぎ。こゝから道は六尺にせばまった。この道ばたで

「矢細工には大聖人の遺跡はないのではないか」

と村人から聞かされて、つい迷いが起つた。その上、矢細工は次の川平部落へ行くのに遠廻りになつており、一方には直接中山と川平を結ぶ遠間峠

があり、その下をくりぬいた隧道の近道がある。この道も随分古い道という。

いずれが大聖人の歩かれた道なのか？

我々は迷いながらも、近道の隧道への道を選んだ。こうした山道では、通る人の影すら稀である。三人の撃つ太鼓の響きのみが、空しく山から山へ、谷から谷へとこだまするばかり。

心細い思いで川平部落につくと

「少し山を下つた夜子沢（よこさわ）部落に日蓮宗のお寺がある」

と聞かされて、闇夜に灯台の灯を見出したような思いがした。

午後五時、夜子沢の部落へ入つた。お寺は妙向寺という、身延山布教部に勤務している秋山上人のお寺だった。大学の先輩でもある。

「これから小室山へ行くのは大へんだから、今日はこゝに泊つて、明朝早く出発するように……」

とすゝめられ、旅装をといて温い歓待に旅の疲れを休めた。

行脚の第一夜である。然し、初日から予定通り歩けなかつたことには、

恥しいやら不甲斐ないやら……そういう気持が拭い切れなかった。

九月二十七日 晴

今日こそは、昨日の分をとりもどそう

と意気込んだ。秋山上人のお母さんが旧道の入口まで案内された道は二尺幅のけわしい山道、途中道をおろす草のため、方向さえ判らなくなってしまうた。

朝八時、やっとの思いで平須という部落に入つた。こゝには妙光寺と長遠寺という二軒の日蓮宗

寺院があつたが、いずれも無住。

村人に聞けば、

「二軒とも今より五百年ばかり前真言宗から改宗したお寺で、曾つては立派なものだつた」

ということだつたが、こういう山間では、お寺の生計も成り立たないのだろう。主なきお寺の境内は、一面雑草におゝわられていた。

なお長遠寺の本堂の脇にある小さなお堂の須弥壇の下には、昔から黒蟻の大群が巣を作り、巨大な蟻の塔が出来ていた。天然記念物に指定されて

いるというが、信仰上からみれば、どういふことになるのだろうか。ともかく無気味なほど物凄い蟻の大群だつた。

平須から久成へ向う途中、一行の渡辺君が激しい腹痛を訴えはじめた。三人とも足は豆だらけ。血豆である。汗とほこりにまみれた三人は、互にいたわりあい、励ましあつて歩きつゞけた。

午前九時四十分、久成に到着。こゝには円妙寺と寂遠寺という二軒の日蓮宗のお寺があつた。こゝうした山間の小部落ごとに、二軒・三軒と日蓮宗

の寺院のあることこそ、昔の旧道を物語り、曾つて大聖人が歩かれ、教化された面影を留めるものであるつ。

思いもかけず円妙寺は、身延山本院学生の秋山君のお寺だった。救われた思いで小憩、歓待をうける中、秋山君のお母さんから、
「これから大塩部落を通つて小室山へ抜ける道は、非常にけわしく案内なしでは、とても歩かれたものではない。それに大聖人が通られたかどうか…：そういう話しは聞いたこともない」

と聞かされて、すつかり思案に窮した。

「遭難することはないにしても、道は迷いやすいし、一度迷つたらなかなか本道へ出られない」

と聞くと、山奥の大塩部落に妙伝寺・薬王寺・法永寺・仙応寺という四軒の日蓮宗寺院があり、地図の上の道筋からみても、
「大聖人の通られたのは、おそらく大塩への道だう」
とは考えられても、ついひるんでしまって、国道筋の石切という町へ下つてしまった。

石切は夜子沢から下つて来た道とも一緒になるところである。結局、我々は平須・久成と山の中を廻り道をしたことになるわけであるが、行脚の終つたあとでも、

あの時、勇気を出して大塩へ歩いておけばよかったのに…
と後悔されてならなかった。人生には必ず分れ道がある。一つはけわしい道、一つはやさしい道。
この時、凡夫は、心ではけわしい道を進むべきだと思つても、つい体の方がやさしい道を選んでしまいがちである。

人生の岐路に立つた時、

たとえ迷つても、けわしい方の道を進むのが、勇者の道であり、成功の道ではなからうか。

切石には善妙寺と正伝寺という日蓮宗のお寺があつた。曾つて善妙寺の境内には「日蓮大聖人御手植の木」と伝えられる老松があつたという。この大木は最近倒れたゆゑ、これを削つて、記念の宝塔が建てられていた。こゝで中食をとつたが、善妙寺に大聖人の御手植の松があつたことが事実とすれば、大聖人は石切を御通過されたことになる

うか。

石切へ下つたことが、ケガの功名であつてくれゝばいゝが：

と語りつゝ、それより富士川にそつ国道を、鰻沢へと急いだ。

午後の太陽は容赦なく照りつけた。国道は舗装されておらず、切り砕かれた砂利が、道一杯にひろげられているため、足裏の豆は、刻々に数を増し、刻々に大きくなつて行つた。

行き交う車が、砂塵とハイキガスをまきあげ、息もつきにくい中に撃つ太鼓の音さえ、ガンガン

頭にひびき返つた。

午後四時、やつとの思いで鰻沢の町に入った。ウナギの寢床のような町であるが、こゝには蓮久寺と蓮華寺という寺院があつた。

蓮久寺には六老僧白蓮阿闍梨日興上人の、慈母に抱かれた幼少の頃の木像が安置されており、蓮華寺の境内には、日興上人生誕の地を記念した大きな記念碑が建つていた。両寺は約三丁ばかり離れてはいるが、昔は大井ノ荘の領主、大井橋六(きつろく)の邸内であつたと思われる。

日興上人は橋六の子として寛元四年三月二日こゝで生れた。幼少の頃、父に死別し、母が武蔵の網島家に再嫁したゝめ、母の実家の駿州河合の由比氏に引きとられ、長じて岩本の実相寺に出家。

正元元年大聖人が実相寺



鰻沢蓮華寺境内の日興上人生誕

記念碑前における住職と行脚隊

に来つて一切経を閲読中、大聖人の弟子となり後年、父方と母方の縁故をよりどころとして、甲駿両国にかけて大いに教線を拡張した。

弘安五年九月九日、池上へ向われる大聖人が、一泊された大井ノ荘とは、日興上人の父方の館であったことはいうまでもない。

なお蓮華寺の開山は、日興上人の肉弟である寂日房日華上人。このため寺は、開山以来十五代まで富士門流に属し、後に日蓮宗に転宗して現在二十二代とのことだった。

さて我々一行は、鰻沢より小室山妙法寺へ進むべきところ、寄り道とはなるが、国道ぞいの次の町である青柳に昌福寺をたずねた。この寺の山号は寿命山という。そのいわれをたずねると、小室山の善智法印が大聖人に論伏され、これを怨みに思つて毒入の餅を大聖人にさし上げた。この餅を

大聖人は庭の白犬に与えた。犬は血をはいて死んだ。この白犬を葬つた所が下山の上沢寺であるが、これによつて法師は心より改悔し、爾来、厚く法華経を信ずる一方、大聖

人の寿命の一日も長からんことを祈って祖像をきざみ、大聖人の開眼をうけて、青柳の里に一宇が建立されるや、肉弟の昌福阿闍梨日全上人を開山として住せしめたという。

なお善智法印は大聖人より恵頂阿闍梨日伝という法号をさずかり後に中老僧の中の一人と仰がれ、建武二年二月十二日遷化している。

今の住職は身延山布教部長岩間湛良上人、あいにく不在であったが、お嬢さんたちの温い接待をうけ、これより道を引き返して小室山へ向った。

小室山妙法寺は日蓮宗の本山である。貫首は笹津海学上人。到着したのは午後七時半。日はとっぷり暮れていた。

七月二十八日 晴

小室山は日蓮宗へ改宗する以前甲州一円における修験道の総本山であったせいか、境内の規模は大きい。寺宝としては大聖人の御真筆大マンダラをはじめ、善智法印所持の負櫃や法螺貝等が格護されており、山門の外には善智法印が大聖人と法力を競ったといわれる大

盤石が残されていた。この時、法印は法力をもつて、この大盤石を空中高く浮かせた。

これに対して大聖人は、法力をもって空中の大盤石を、地に降させなかつたという。

この伝説は、如何にも紛飾された幼稚な宗教劇としか現代人には受けとられないかも知れない。然し、欧米における心靈研究では、霊媒者が念ずる中に、何トンもあるような物体が、空中に浮き上ることを、科学者の立ちあいのもとで屢々実験されている。

そういうことを思いあ
わせるよこの法力くらべ
の伝説も、あながち否定
出来がたいものがありは
すまいか。

我々は、こんなことを
語りあいながら、再び鰻
沢の町を通り、富士川を
渡り、身延線の鉄道を越
えて、市川大門町高田の
長生寺に到った。

長生寺の住職は、身延
山大学教頭松木本興先生。
先生の説明によれば、
「大聖人が曾根へ向われ
た道は、現在の川ぞいの
県道ではなく、その上の
台地の中の旧道である」
ということだった。お

そらく山間の小部落を縫
う小道である。

先生の説明を聞く中、
河から吹き上げて来る風
が涼しかった。長生寺の
裏あたりで、笛吹川と釜
無川が合流して、こゝか
ら富士川がはじまってい
る。

こうした地形にもよる
のであろうか、市川大門
町の山手の三珠町という
台地が、甲斐源氏の発生
の地といわれている。

また余談であるが、天
下の名優団十郎が市川の
姓を名乗ったのも彼が市
川大門町の出身であつた
からだという。

先生に見送られて曾根
へ行く途中、流通寺に参
拝した。こゝは身延山の
祖廟輪番本部に勤務され
ている田中静光上人のお
寺。境内には天然記念物
に指定された白檀の大樹
が青々と繁っていた。

なお聞くところによれ
ば境内には、柿の実の内
に、また柿の実が結ぶ「二
重柿」という、珍らしい
柿の木があつて、天然記
念物として申請するよう
に、県から要望されてい
るという。

これより大聖人が一泊
された上曾根へと急いだ
が、水筒の水はたちまち

無くなり、沿道にはカゲ
ロウが立ちのぼっていて、
まるでホウロクにいられ
るような暑さだった。

底の薄い白の地下足袋
の下からは、焼けた小石
が否応なしに食い入り、
足裏の血豆は煮たって、
「これは地獄の苦しみか
とさえ思われた。

午後五時、上曾根の部
落へ入った。さっそく村
人に大聖人の遺蹟をたず
ねると、

「妙石庵の庭に、大聖人
の高座石がある」

と教わった。行ってみ
ると道ばたに、それらし
き岩があったが標識もな

く、妙石庵とは名ばかり
の堀立小屋で、誰も住ん
でいる様子でもなかった
隣家の人にたずねると、
「ずっと以前から何処か
へ引越されて行方は判ら
ない。大聖人のことなら
袈裟掛の松の家で聞いて
御覧」

と言われた。

袈裟掛の松の家、それ
はワラブキの黒ずんだ古
い民家だった。大聖人が
袈裟をかけられたという
松の太木は、庭一杯に見
事な枝を張っていた。

案内を乞うと、一人の
老婆が出て来た。家人は
他に見当らなかつた。聞

くところによれば、この
家こそ大聖人が弘安五年
九月十日、池上へ向われ
る途中、曾根で一泊され
た家だといふ。

なお老婆の語る当家の
由緒は、およそ次の如く
であつた。

この家は、明治七年の
戸籍改正の折、上曾根の
大字堀ノ内という地名に
よつて「堀内」と姓を改
めるまでは、代々「曾根」
の姓を名乗っていたとい
ふ。

今を去る五十一代の頃、
曾根家より二丁ばかり離
れた道端の、巨石(後の高
座石)の上に坐つて、村人

に説法する一人の若い旅僧がいた。

夜になつても去らないので、曾根家に案内すると、終夜家族の者に対して法華経を説き、たまたま囲爐裏に自在鉤のないのをみて、手ずから一個の鮎を刻み、その使用法を教えて、朝の明け方、漂然として何処となく旅立つて行つた。

越えて文永年間、曾つての旅僧が弟子二・三をつれて再び来訪しみずから「日蓮」と名乗つて、曾根家を宿とし、高座石で説法すること一週間、その間、曾根家の菩提寺

である龍華院に法論を挑んだ。然し龍華院の住職は、病気を理由として応じなかつたという。

たまたま曾根家では、新築の家が落成した。大聖人はみずから上棟式に臨まれ、火難・盗難除けの棟札をしたゝめられ、次いで棟木にも経文を写された。

爾來、七百年、曾根家では一度も災難にあつたことがないという今日、家が黒ずんでいるのも、そのせいであるかも知れない。

当時、曾根家の当主は曾根治郎正晴。正晴に二

人の弟がいた。一人を伝内といふ、その妻を政といつた。政は久しく産褥に悩んでいた。そこで大聖人が、真錦に薬種をつゝみ、「五香の湯」として与えると、靈驗たちどころにあらわれ夫婦して弟子となり、伝内は妙伝政は日円という号をさずかつた。

後年、大聖人の佐渡流配中、妙伝は、はるばる佐渡に大聖人をたずねて御本尊を授与せられ、妻の日円もまた、江戸に一字を建立して報恩にそなえた。今の堀ノ内の日円山妙法寺がそれであると

いう。

また当主の治郎正晴も御本尊の授与をうけ、後年高座石のそばに一宇を建立、大聖人の尊像を安置して妙石庵と称した。

越えて弘安五年九月十日、池上へ向われる大聖人の一行が曾根家に一泊。この時、大聖人が紙包みを取り出し、

「我が病い、目出度く平癒したならば、また会うこともある。若し我が亡きあととは、これを我が魂のこもれるものとして、大切に格護せよ」

と手渡された。この紙包の内のものこそ、大聖

人が九ヶ年の間、身延山中で御使用になられた法華經十巻の經巻であつたという。

このほか家宝として、水止のお経石、「子さずけ安産の子持石」ならびに大聖人一泊の折、御使用された茶椀などが秘蔵され、御使用の箸は祖母の代まであつたという。

老婆の語る曾根家の由緒と家宝は、大体以上の如くであつたが、宝物は悉く箱にしまわれ、或は紙に包まれたまゝ、

「開けば目がつぶれる」という言い伝えによつて、内を拝観することは

出来なかつた。

このため真偽のほどは論ずることも出来ないが、曾根家が甲斐源氏の発生地近く、また曾根氏が甲斐源氏の中の豪族であつたことは歴史的なことから、大聖人が弘安五年九月十日一泊された曾根の宿も、この家であつたことは疑われないところであろう。

既に日はとつぷり暮れていて。実は、今夜、曾根家に一泊させてもらいたい

と思つていたのだが、「これから、どちらに行かれますか」

と老婆に聞かれて、

「いや泊めてもらいたいのです」

と言いつ返す心臓の持ち

あわせもなく、

曾根家の由緒や家宝について
は後日、専門的に研究する余地がある。何時かは、きつと調べさせてもらおう

と、心に期して外へ出た。

さて、外へ出たものゝ泊るあてはない。大聖人が次に泊られた所は黒駒。地図の上でみれば、

一上曾根から石橋、御所、岡、竹居、大野寺という部落を経て下黒駒へと、

山の麓を縫って行くコースが、おそらく大聖人の

歩かれた道であろう一

とは思われながらも、

夜分、人も通らない山道を、

しかも初めて歩くと

なれば、却って道に迷つてしまふ。

そこで、コースは少し

それるが笛吹川ぞいの県

道を、石和(いさわ)の町

へと向つた。石和には大

聖人の霊場として有名な

鵜飼山遠妙寺がある。

一行の足は、悲しいほど

重かつた。腹はペコペ

コ。荷物が肩にくいこみ、

撃つ太鼓さえ急に重くな

つた。

夜十時半、石和の町へ

入り、夕飯代りのパンを

買い、遠妙寺の門前に立

つたのは、既に十一時に

近かつた。

あまり遅いので、庫裡

へ声もかけず、本堂の軒

下の廊下にゴロ寝して、

パンをかじつた。

夜空を仰ぎながら一人

が言つた。

「大聖人もつらかつただ

ろうネ。御病氣だつたか

ら……」

間もなく、泥のような

眠りにおちた。

このお寺は、平家の落

武者・平大納言時忠が、

鵜飼勘作という漁師に身

をやつして生計を立てる中、孝養のためとはいえ、禁漁を犯して処刑され、その霊の浮ばれなかつたところを、文永十一年五月の末、大聖人甲州巡錫の砌り、みずから法華経一部八卷二十八品、六万九千三百八十四文字を河原の一字一石にしたゝめ、河底に沈めて川施餓鬼供養をいとなんだ功德によつて、はじめて成仏得脱することが出来たという由緒によつて建てられたもの。

この物語りは歌舞伎や人形浄瑠璃にも上演されており、その時の一字一

石の一つという「諦」の字をしたゝめた石が、今なお伊豆玉沢の妙法華寺の宝蔵に保存されている。遠妙寺の山門前には、「宗門川施餓鬼根本道場」という碑が高々と建てられていた。

七月二十九日 晴

早朝、遠妙寺住職長沢順諭上人が、朝のお勤めのため本堂へ来られた時、我々の姿をみて驚き、

「昨夜、一こと声をかけてくれゝばよかつたのに……」

と同情されたり励まさ

れたり…それに勇を鼓して国道を黒駒へと急いだ。笛吹川を渡る頃、太陽がアスファルトに照り返して燃えるような暑さとなった。沿道には、色よく実つた桃の畑が、果しくなくつゞく。

朝九時、下黒駒の町へ入り、大聖人の遺跡をたずねたずねて、岩間宣計氏の家に至つた。

その家の庭さきには、道路に面して、

「日蓮大菩薩御腰掛石」

と刻まれた碑が一基建つておりその下に、それらしい古い岩があつた。

記録によれば大聖人は

弘安五年九月十一日、黒駒に一泊されたことになつてゐるし、下黒駒、上黒駒を通して大聖人の遺跡は、ここにしかないとする、一泊された民家も、おそらく岩間氏の家であつたのたろう。

氏の語るところによれば、

「大聖人は岩間家の御供養に対して、フジヅルで大マンダラをしたゝめられて授与された。然し、この大マンダラは何時の頃、どうしたわけか、同じ下黒駒の臨濟宗建長寺というお寺へ渡り今もそのお寺に格護されている、

と言ひ伝えられている」ということだつた。この時、

ついでに建長寺まで行ってみようか

という説も出たが、いづれ曾根の資料も改めて調査する必要があるので、

研究は次の機会にしよう

ということ、その日は名産の桃を御馳走になつたまゝ、先きを急いだ。

下黒駒の町の出はずれにさしかかると、幕末の頃、遊侠の大親分として名高い「黒駒の勝蔵」を顕彰した高さ一丈ばかりの石碑が建つていた。

これより御坂峠への道となる。昔は鎌倉街道ともいわれてゐたそうだ。

上黒駒の町をすぎて間もなく、十郎という部落があつた。街道を横切る金川という川には、十郎橋という高い橋がかゝつていた。

聞いてみると、その昔、蘇我五郎、十郎の兄弟が、十八年間の辛苦の後、建久四年五月、富士の裾野の狩場で、父河津祐泰のかたき工藤祐経を討ち果し、この川の流れて血刀を洗つたのだという。

やがて一行は藤野木という所へ来た。こゝには

昔、駒木戸関があつて、

口留番所のきびしいサクがあつたという。今はその跡もみられないが、左右の山が屏風のように迫つていて、道もいよいよ急になつて来る。

午後一時二十分、御坂峠の麓の御坂町につき、茶屋で旧道を聞き国道と別れて、キコリしか通らぬ右側の細い道へ入つた。

やがて旧道が二つに分れた。一行は左へ道を取つた。これが間違いのもどだった。本当の旧道は右側だったのだ。そうとは知らず、グングン道坂を進む中、道らしい道は

なくなつてしまつた。

「山で道に迷つたら尾根へ出よ」

という諺を思い出し、物凄い傾斜の崖を、三人とも四つばいになつて、よじ登つた。下をみれば

千仞の谷底、気味が悪いやら、心細いやら……やつとの思いで尾根へ出ると、天の助けか山師に出あつた。

さすがに山師もギョツとした。無理もない。こんな山の中で、何世紀も前の、墨染の衣に手甲脚絆をつけ、綱代笠をかぶつた三人の坊主に、ふいに出あえば、驚かない方

がどうかしている。

然し山師は、親切に旧道を数えてくれた。若し、この山師に行きあわなかつたならば、或は遭難するぐらいの、ひどい目にあつたかも知れない。

ところが折角おしえてもらつた道も、また間違え、行きつ戻りつしながら、やつと御坂峠の山頂についたのは午後五時三十分。

ホット一息ついて眺める富士の霊峰は、夕陽に照りはえて素晴しかつた。こゝは海拔二五二五メートル、甲州富士見三景の一つに数えられている。

大聖人もこの富士を仰

がれた。我々も今も、この富士を仰いでいる。今も昔も富士の峰には変わりはない。然し七百年の昔、御坂峠を越えられた時の、大聖人の御難辛は如何ばかりであつたらうか

と、我が身の苦勞をかえりみてそう思わずにはおられなかつた。峠より麓へ下るのは一息である我々は道を急いだ。太鼓も強く撃ちつづけた。法響は山から山へとこだまして、遠く富士の峰へと流れて行った。

午後六時四十分、河口湖畔につき、河口湖町へ

入つたのは夜八時。

この町には大聖人が池上へ赴かれる時、則ち弘安五年九月十二日一泊されてゐる。その家は、大正の頃の螢沢氏の調査の結果にもとずくと、浅間神社の社家十二ヶ坊の一つである渋江囲幡上ノ房で、上ノ房は後に梅屋と称して明治時代までつゞいていたという。では梅屋は、今どうなつてゐるか

と町の人々にたずねてみたが、一向に要領を得ない。既に八時を過ぎてゐる。

こゝも、次の機会に再

調査しよう

ということにして、富士吉田市にある身延別院上行寺に電話をかけ、今夜の宿泊をお願いした。突然のことではあつたが、住職上人は快諾された。

我々は船津町、赤坂町と旧鎌倉街道を富士吉田市へ急いだ。

上行寺は吉田浅間神社の近くにあり、曾つて身延山街頭布教隊として参拝したことのある懐しいお寺。到着した時は、もう九時を過ぎていた

。その夜おそくまで、住職上人を囲んで、弘安五年九月、大聖人が池上

へ向われた時のコースについて、色々と御指導を仰いだ。

古い記録によれば大聖人は、九月十三日、富士吉田より指呼の間にある呉地という部落に一泊されている。

また別の記録によれば、呉地一泊の宿は遠山藤学の邸であった、とも記されている。

然し、これを裏付けるものは当地には見当らないということだったが、「最近になって、上呉地の町の志村家から、三位(さんみ)日順の通行手形が見された」

と言われた住職上人の言葉は重大だった。三位

日順上人といえは六老僧日興上人の、弟子の中の逸材であり北山本門寺内の重須(おもす)談所の、大学頭までつとめたほどの学匠であった。

これほどの学匠が、何時の頃であったとしても、上呉地の志村家に通行手形を残したとすれば、それはおそらく日順上人が、大聖人一泊の遺跡を慕って来たこと、当然うなずかれることであるから、この手形を頼りにたどって行けば或は志村家から遠山藤学邸へと通じ、大

聖人一泊の遺跡も探し出されるかも知れない。

それにしても富士吉田には、富士山信仰の講元をしていた塩谷平左衛門という人が、文永六年の頃より大聖人の篤信者となつていたのであるから、本来ならば大聖人は呉地に泊らず、吉田の塩谷邸に泊るべきではなかったか。それにもかゝらず、呉地に一泊されたのについて、呉地に新しい篤信者が出来ていて、その人から敢て招待されたのか。

或は、その招待にあわせて上呉地が、三国峠へ

の登山口となつていた、
めであるうか。

然し、コースを中心に
して考えるならば、三国
峠のコースよりも籠坂峠
のコースの方が開けてお
り当時の鎌倉街道も籠坂
峠を越えている。

何故、大聖人は吉田に
泊らず、呉地に泊られた
のか。その遺跡は何処に
あるのか

大聖人が呉地よりたど
られた道は、三国峠の道
なのか、籠坂峠の道なの
か

以上のようなことを討
議する中結論を得ないま
ゝ、はや時刻は夜中の十

二時を過ぎていた。

七月三十日 晴

早朝、上行寺住職上人
の車で、河口湖畔大嵐の
蓮華寺に、八須日忍上人
を訪ねた。

それは身延出発に際し
て、八須上人を訪問する
よう言われていたからで
ある。

七時、蓮華寺到着。八
須上人も鶴首されていた。

上人は創価学会折伏のベ
テランであり、このため
全国を行脚された尊い体
験の持主でもある。

蓮華寺で朝食の供養を
受けながら、八須上人よ

り行脚の心得を種々教示
して頂き、それから一旦
上行寺へ引き返し、三人
の豆だらけになつた足裏
を治療して頂くため再び
上行寺住職上人の車で、
檀家である坂本照正さん
の家へ向つた。

家は山中湖畔の、山中
湖村にあつた。坂木さん
は、これからの長い道中
のため、少々手荒く徹底
的に治療された。

山中湖村は、三国峠へ
の道と、籠坂峠への道と
の分岐点になつている。

どちらの道を行くべきか、
こゝが思案のしどころだ
つた。

決め手は、今夜の宿が

御殿場の仏舎利塔。そこへ行くには、籠坂峠を越す方が、道も近い。それにこの道が旧道倉街道。

時に午時十一時、上人や坂木さんの家族と別れを惜み、籠坂峠への一步を踏み出した。道は山中湖畔にそつていた。いやでも湖畔に遊ぶ多勢の、観光客の姿が目につつる。観光客も、我々の姿に変な顔をしている。

同じ夏のひと時を、遊ぶ者と修行する者

そう思つて、彼等を横目で見ながら、改めて行脚の意義を、胸にきざみ

なおした。

籠坂峠の手前の茶屋で中食をとり、峠に立つたのが午後一時半。程なく県境を越えて静岡県に入り午後三時須走を通りぬけた。

この辺は車の通行量も多く、歩いている者は一人もいない。走りすぎる車の中から、ヤジる者もいれば、ミカンの皮を投げつける者もいる。然し我々は、ただ一心に撃鼓唱題しながら歩きに歩いた。

宇宙衛星を飛ばし、月旅行も夢ではなくなつて来た科学時代の今日、数

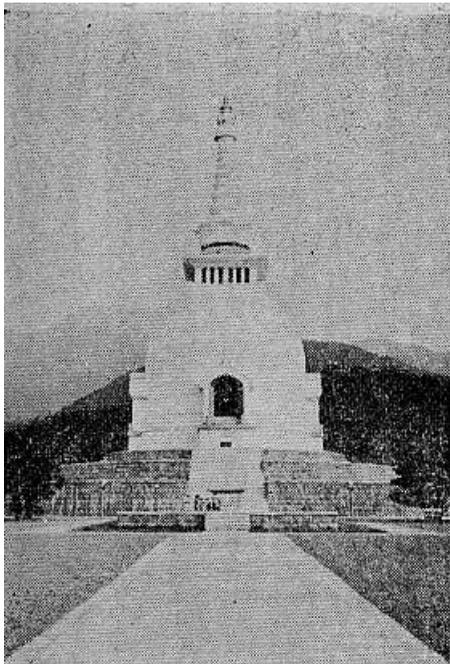
世紀前の古色蒼然たる行脚姿で、テクテク歩く者は馬鹿かも知れない。

然し、だが然し、眞の平和は、いずれの側にあるのだろうか。文明を謳歌する者が人類を破壊し、馬鹿と思われる少数の者が、立正安国の道につらなっている。

科学が人間を嘲い。嘲わるゝ宗教が、嘲う人々に祈りを捧げている。

但行礼拝、人間礼拝、現代を救うものは、最早この実践のほかはない

と、心に繰り返しながら歩く中夕闇が迫つて来た。歩く足にも、体全体



霊峰富士に対した
御殿場仏舎利塔の威容

にも、唱えるお題目の声にも、疲れが出はじめた頃、ネオンに明滅する御殿場の、町の彼方の山腹に、夕闇に包まれながら、燦然と輝く仏舎利塔の姿が見えて来た。

「あれだ！仏舎利塔だ！」
我々は思わず叫んだ。
涙が臉ににじんだ。足も

おのずから早くなつていった。

御殿場の街を突っ切り、箱根へ向う国道を行くと約一里、めざす仏舎利塔に着いたのは夜八時。

そこには照明に照り出されて、夜空に浮ぶ壮大な仏舎利塔が、あたかも我々の行脚を迎えるかの

ように屹立していた。

この仏舎利塔のドームの内には昭和三十七年の夏、鷲峰会第一回の行脚として、身延より鎌倉へ向つた際、祖廟の清流で拾い集めた、一字一石の経石が、学生行脚隊によつて持参奉納されている。

また霊峰富士に対する此の仏舎利塔の、正面本尊である金銅の釈尊像は、身延山の釈尊像を原型として、身延山よりインド王舎城靈鷲山の、仏舎利塔正面本尊として寄進された金銅の、釈尊像と寸分も違わないものもある。

身延山―富士山―靈鷲

山この三つの靈山は、今や釈尊と法華經によつて、より固く結ばれようとしている。

「日は東より出て西に入る。日本の仏法の月氏（インド）へ返るべき瑞相なり」

大聖人のこの予言は、不断の撃鼓宣令、但行礼拝の實踐によつて實現されて行くであろう。その夜は、仏舍利塔を監理している三徳の、社員の人々に出迎えられ、三徳の道場に一泊させて頂いた。就寝十一時。

御殿場より池上へ

身延山大学一年

渡辺政彦

七月三十一日 晴

昨日、御殿場についたのが夜であつたため、仏舍利塔の周辺が、どんな風光なのか見当もつかなくかつたが、今朝、夜が明けると宝塔を中心とした山全体が、さながら「白法の大王座」といった感じだった。

午前九時、三徳の社員に見送られて道場を出発、途中、御殿場市内の三徳の会長堀内貞良師の実家

に立ち寄り、一泊のお礼を述べ、その家の前から足柄街道に入った。

街道は、左右どこまでもつゞく杉並木の木立ちにおゝわれ、昔ながらの面影を留めていた。

突如、物凄い夕立ちに見舞われた。雨はたちまち小川のように街道に洗い流れた。

身延を出てから始めてあつた雨であるが、雨あがりの爽快さはまた一人。然し、気は軽くとも足は重い。連日の歩きずめで、重い石でも引きずっていいようだった。

午後二時、足柄山の麓

の竹ノ下の部落に入った。弘安五年九月十四日、大聖人が一泊されたのは此の部落である。

一泊の御霊跡は何処だろう

と部落の中を進む中、御殿場線足柄駅とは目と鼻の、鮎沢川をへだてた道端に、法華宗常唱院というお寺があり、その門前に、

「日蓮大聖人二泊の御霊跡」

という石碑が立っていた。二泊というのは、文永十一年五月十三日、身延入山の折の一泊をも意味している。

案内を乞うと、明治大学を卒業したばかりの中村上人という住職が出て来られた。

聞けば上人は、部落の人々から大へん敬慕され、高校生や中学生までも、毎日欠さず唱題修行に來ているという。

事実、我々がついて一時間もたゝない中、本堂の内は、近所の信者や、高校生、中学生で一杯になつていた。

これには驚くと共に、深く考えさせられた。通行人も稀な山間の小部落の中のお寺でさえも、指導者の真剣さと真面目さ、

そしてその熱と気迫には、毎日のように子供たちまでも集つて、唱題修行するという、この事実である。

人の雑沓している都会の寺院に青少年活動の見るべきものが少く、やっているかと思えば、理論に走るか、リクレイションずわりになつているか、ともかく純一無雜の信行に徹して行こうとする運動はまことに乏しい。やはり指導者の如何によるものである。

この日、我々は足柄峠を越える予定でいたが住職や大勢の信徒に強く引

き止められ、住職とは、もつと語りあいたい心もあつたので止められるまゝに旅装を解いた。

昭和三十七年夏の行脚の際、日高上人が竹ノ下の遺跡について、相当深く調査されている。

それによれば、足柄街道は歴史的な古道で、当時住来も頻繁であつたが、徳川時代より箱根街道の方が盛んになつたゝめ、すつかりさびれ、竹ノ下も寒村となつてしまった。

大聖人が一泊された竹ノ下の宿は、鈴木繁八を先祖とする民家であつて、住来に面した板壁の、見

越の松のある平屋であつたという。

当時、家の中には、風変りな二人の老婆がいたのみで、

「古い家は、因縁が深いもので、私の家は代々婿養子。しかもその婿が、皆若死にしまつてしまふ因襲があつて、今も母子して後家なんですよ」

と、前置きしながら語る二人の老婆の言をあわすれば、この家は代々竹ノ下の豪族で、この辺一帯を宰領し、終戦当時までは多くの地所や山林をもつていたという。

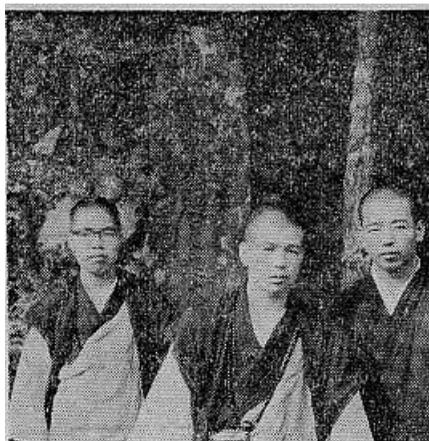
家宝としては六老僧曰

興上人の腹こもりの尊像をはじめ、土地が要害であつたところから、合戦のあるたびに功を立て、武田信玄より拝領した陣羽織とか、加藤清正より頂いた御墨付き、等々の古文書が沢山秘蔵されてお

り、
「今では常唱院の方が、大聖人宿泊の霊跡として言いふらされているが、実は常唱院の地所は、もともと鈴木家の墓地であつて、今でも墓碑研究者が驚くような、古い珍しい墓がある。

代々の言い伝えによれば、たまたま大聖人が鈴

木家に宿泊された時、これを縁に、鈴木家も法華経を信ずるようになり、宿泊を記念してお題目堂を建てる時、墓地を地所として選んだのにすぎない。だから宿泊の霊跡は、



竹ノ下常唱院日蓮大聖人
宿泊記念碑の前で 右よ
り小林・仲・渡辺の三名

木当は鈴木の家の方である。

その後、お題目堂は、堂守がいたり、いなくなったり、お堂がこわれたり、建て直したりした時代もあつたそうだが、近年になつてお寺の形体が整うようになり、大聖人宿泊の霊跡という記念碑も、その門前に立つようになつたのだ」

ということであつたという。

「だから今度、竹ノ下へついたなら、もう一度その家を、詳細に調査してみるように……」

と、身延出発に際して、

日高上人から内示されていた。

そこで、その由を住職の中村上人に伝えると、さつそく上人は八方に手を尽して、その家を探された。然し杳として所在すら判らなかつた。

なにぶんにも、その家には風変りな老婆がいたというのであるから、おそらく長い歲月、近所ずきあいもせず、深く門を閉じているのかも知れない。或はまた、既に代が變つてしまっているかも知れない。

手の施しようもなく、

その夜は中村上人と、法

門のことなど語りあって
夜を更かした。話しの中、
最も興味深い問題は、や
はり本尊問題であった。

八月一日 晴

法華宗独特の朝のお勤
に列して、常唱院を出発
したのは朝八時。

御殿場線の足柄駅の踏



足柄山腹、大聖人小憩を記念した丈余の大宝塔

切を越すと、すぐ道は急
になる。峠まで約一里。

中村上人の案内で、ま
ず常唱院の行場であるお
滝に参拝。急坂を登って
尾根へ出ると、高さ一丈
もある一枚岩のお題目の
大宝塔が建っていた。近
くに大聖人袈裟掛けの松
の木があり、美しい枝ぶ
りをみせていたが、こゝ

は風光絶佳、真正面に靈
峰富士の全貌が、手にと
るように望まれた。

その昔、大聖人もこゝ
に至って晴々しくこの展
望を満喫せられ、暫し時
のたつのも忘れられてい
たという。大宝塔もこれ
を記念して建てられたの
である。建立願主には、
御殿場近在の寺院名が列
記されていた。

十時三十分、こゝで中
村上人と別れをつげ、撃
鼓して峠へ向った新道と
旧道とがあつたが、もち
ろん旧道を進んだ。

いくばくもなく溪流の
そばに出た。横には南無

阿弥陀仏と刻まれた一丈ばかりの宝塔があつた。

昔、多くの旅人が雲助や追剥に襲われて惨殺された跡という。遊魂のたゞよう無気味な場所であつたが、山肌も谷川のせゝらぎも、七百年の昔と少しも変らぬ自然の姿であつた。

溪流の水を水筒につめて、旧道をあえぎあえぎ登りつめ、足柄峠に立つたのは午前十一時十分。山頂の聖天堂の、横の茶店で小憩し、ハイカー連に混つて中食。

これより下ること一里にして矢倉沢、また一里

にして関本の街となる。

午前十一時四十五分ころを出発、一気に山をくだつて山麓の、バスの発着点の地藏堂、矢倉沢(落武者部落)の入口の関場、苅野、弘西寺をすぎて午後二時五十分、雨坪にさしかゝると道端に、

「日蓮大聖人一泊の霊場」という石碑が建つていた。こゝは日蓮宗弘行寺の入口。大聖人は弘安五年九月十五日、池上へ向われる折、こゝで一泊されてゐる。

記録によれば、関本の下田五郎左衛門の家に泊られたことになつてゐる

が、おそらく弘行寺が五郎左衛門の邸跡であらう。

本堂の前には、大聖人の腰掛石があり、本堂の裏の墓地の中には大聖人の爪墓があつた。爪墓とは珍しいものであるが或は一泊の折、切られた大聖人の爪を、大切に保存し、大聖人滅後これをお墓として建てられたものかも知れない。ありそうなお寺もある。

なお寺宝として龍華日像上人のマンダラ本尊。或は養珠院お万の方が使用されたという碁盤。それは側面に豪華な塗絵巻が施されてはいたが、虫

に食われて余りにも古びていた。

こうした寺宝は、日像上人やお万の方が、大聖人の遺跡をたずねられた折の名残りを留めるものであるうか。

午後四時、弘行寺を辞して秦野(はたの)へ向った。というのは大聖人が次に泊られた所が、平塚の長谷川邸(今の要法寺)であるところから、弘行寺より関本へ出、酒匂川(さかわがわ)ぞいに河口に近い今井へ下り、そこから対岸の酒匂へ渡り、東海道をのぼって平塚へ行くという路線と、もう

一つは、関本から直接酒匂川を渡って松田へ出、

秦野を経て平塚へ行くという路線、この二つのコースが考えられるが、いずれにしても古道であり、

—この中、どちらを選ぶべきであるか—

—ということになると、—
—大聖人は何処で酒匂川を渡られたのか—

—ということが決手になって来る。

ところが東海道筋は、海岸ぞいの景色もよく、旅情も楽しむことが出来るが、曾って文永十一年五月十二日、大聖人が身延へ向われる道中、酒匂

から今井へ川越えされる時、折からの増水で、一旦舟を引き返し、その夜は酒匂の地藏堂(今の法船寺)に一泊された事実がある。

今こそ酒匂川の上流には、発電所が出来ているため、水も少なくなっているが、その昔は、相当な水カサであったことだろう。

まして弘安五年九月の大聖人は御病体を馬上に托した旅である。身の安全を期するためには、川幅の広い河口まで下らずに、上流の関本のあたりから、酒匂川を渡られた

のではないかと当然考
えられよう。

まして酒匂川は、関本
と松田を結ぶ路線より、
やゝ下の方で、秦野の方
から流れて来る川音川と
合流して、川幅を広めて
いる。こうした考えから
我々は、

「大聖人は、おそらく関
本から酒匂川を渡つて対
岸の松田へ出、秦野を通
つて平塚へ向われたのだ
ろう。」

と推定したのである。

我々は撃鼓して道を急
いだ。酒匂川には十文字
橋という橋がかゝってい
た。考えぬいたコースだ

けに、この橋を渡る時は、
さすがに感慨無量なもの
があつた。

ところが松田から、次
の町の神山につくと、ま
た道が二つに分れた。一
方は小田急線にそつた新
しい広い道、一方は山の
中の細い旧道、

山中で、日が暮れるか
も知れない

とは案じたが、思い切
つて旧道へ向つた。

篠窪・窪庭・栃窪とい

う山間の小部落を縫つて、

やつと平地に出、平沢の
部落を経て秦野の街に入
つたのは、既に夜の九時。

三人とも疲れ切つてク

タクタだった。もう、と
ても平塚まで歩けそうも
ない。こゝで日蓮宗のお
寺をたずねると、

「曾屋の妙法さん」

というお寺があるとい
う。曾屋町の妙法寺のこ
とである。一縷の望みを
かけて門をたゞくと、庫
裡建設のため、総代世話
人の会議中だったが、住
職藤巻日恩上人に温く迎
えられ、一泊の情けをう
けた就寝十一時。

思えば七月二十六日身
延を発つてより、富士川
ぞいに山間の旧道をたど
り、御坂峠、籠坂峠、そ
して今日は足柄峠を越え

て此処まで丸一週間、大聖人の足跡をたずね歩いた苦勞もさることながら、道中、あつたこともない言葉 exchanged したこともない人々から、数々うけた温い激励や一夜の宿、これひとえに大聖人の忍難慈勝のおかげ―

と思えば、思わず溢れる感涙に何時しか枕をぬらしていた。

八月二日 晴

朝七時、妙法寺を辞して一路平塚へ向つた。道は金目川にそつた坦々たる舗装道路。中野、下大

槻、青柳、南金目、飯島という町々をすぎ、平塚市平塚町の要法寺についたのは午前十一時半。

こゝは弘安五年九月十六日、大聖人が一泊された長谷川氏の屋敷趾。境内には大聖人腰掛石が保存されていた。

参拝している中、住職守屋上人が出迎えられ、聞けば当山の子息は守屋宣明上人だという。宣明上人は、同行の小林上人の、身延高校時代の一級後輩。今は立正大学在学中だそうだが、そうと知つて旧友の家に來た親しみを覚えた。

すゝめられるまゝに本堂で二時間ばかり午睡し、午後二時、ザルソバの御馳走にあずかり、二時三十分要法寺を出発、深谷の大法寺へ向つた。

然し、休憩時間が長かつたせい、歩き出すと三人とも、足を地につけることさえ堪え難いほど、足が痛んだ。

歩き出す始め、少々足が痛むのは何時のことだが、今日ばかりはその場でひっくり返つてしまいたいほどだった。

見かねた守屋上人が、八幡、四ノ宮を経て相模川(さがみがわ)の「田村

の渡し」まで見送つて下
さつた。「田村の渡し」そ
れは旧道時代の舟の渡場。
今は神川橋という立派な
橋がかゝつてゐる。

これを渡ると寒川町。

こゝには曾つての国幣中
社であつた寒川神社があ
り、延喜式の相模最古の
社で、一ノ宮総社といふ、
近在に二ノ宮、三ノ宮、
四ノ宮という分社があつ
て、それがそのまゝ地名
となつてゐる。

神川橋から一ノ宮まで、
普通の足取りならば、三
十分もかゝるまいと思わ
れながら、痛む足では一
時間半もかゝつてゐた。

こんな調子では深谷ま
で、到底今日中に行けた
ものではない。途中には、

日蓮宗のお寺は一軒もな
いと聞いて一ノ宮の妙光
寺の門をたゞいた。

住職江藤邦文上人は、
「私も一人で長期の行脚
修行をしたことがある」
と言つて、こゝろよく
一泊を許された。

上人は布教院に何度も
行かれ、布教活動につい
ては非常に熱心な方だつ
た。

その夜は遅くまで、上
人の布教活動の体験談や
ら、今後における布教活
動の在り方について御意

見を伺い、得るところ少
くなかつた。

八月三日 晴

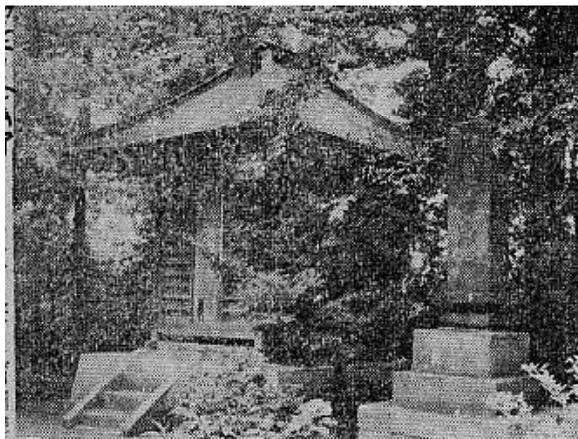
昨夜、充分に足の治療
をしたせいにか、痛みは薄
く、身心ともに爽快。午
前七時、上人や家族の方
々に見送られ、一路深谷
へ向つた。

思い切り力強く撃つ太
鼓の響きと共に、唱える
三人のお題目の声は、道
ゆく人々を驚かすほどだ
つた。

大蔵、猪郷、用田、中
条、吉岡、芝原の町々を
すぎて、蓼川の橋を渡れ

ば綾瀬町の深谷。大法寺は十字街の角だった。

住職高瀬教誓上人は身延参拜中で留守だったが、上人夫人の語るところに



深谷大法寺の淡島堂
と宗祖宿泊碑

よれば、

一 文永八年九月十二日、

大聖人が龍口の首の座をまぬがれ、佐渡流配中、依智(今の厚木市内)の本間六郎左衛門重連の館へあずけられる途次、深谷の辻の淡島堂で休息された

！
ということだった。大法寺の境内には、今もこのお堂が残っていた。

我々は、こゝで三十分間小憩し十一時三十分大法寺を出発。次の目的地瀬谷へと向った。

途中、厚木飛行場のそばを通り小田急江ノ島線の線路を横切って境川の

橋を渡れば、そこから横浜市戸塚区である。

午後一時十分、瀬谷町の宗川寺に立ち寄れば、驚いたことに、このお寺は鶴の紋所。

さては創価学会のお寺に迷い込んだかな

！
と思わず立ち止ったが、そうではなく同じ日蓮宗。住職井出諦道上人にうかがえば、

一 この寺は寛永二年、北山本門寺十二代の貫首日賢上人の開創するところ

！
という。道理で鶴の紋所と思ったが、この紋所は、日蓮宗が大聖人の父

方の紋所として「井桁に橋」を用いているのに対して、日興上人の門流では母方の紋所を用いているのだという。

なお井出上人の語るところによれば、

「弘安五年九月、大聖人が池上へ向われた時の道は、宗川寺の前の道である」

と断言され、これほど心強いことはなかった。

午後一時三十分、我々は宗川寺の前の道、確かに大聖人が通られた道を、境川にそって北上、橋戸、本郷の町を経て、瀬谷町一ノ関の妙光寺に午後二

時四十到着。

住職藤村宣浄上人は他出中であつたが、妙光寺の縁起によれば、

「こゝは奈良朝の初期、孝徳天皇の大化年間、明光比丘尼が庵を結び、釈尊像を安置して妙光庵と称していた。降つて鎌倉時代、弘安五年九月十七日、大聖人の一行が池上へ赴かれる途中、こゝに一泊されたことにより、当時の庵主みずから本化の大信を發して弟子となり、法号を文教院日成とたまわり、妙光庵も蓮昌山妙光寺と改めた」といふ。スイカの御馳

走に舌つづみをうち、午後三時三十分妙光寺を出発、国道一二九号線へ出て東へ進んだ。

横浜市内の保土谷区を過ぎる頃日はとつぷりと暮れた。夜八時、港北区の中山町に入り、横浜線の踏切りを渡つた。

この辺で一夜の宿を乞いたい

と思ひ、日蓮宗のお寺を尋ね尋ねて、川和町の妙蓮寺の門前に到つた。時に夜九時。

こゝは六老僧日朗上人の高弟であつた朗慶上人の開創された所。

本堂前で暫し撃鼓、法

味をさぐげて、恐る恐るお宿をお願いすると、幸い住職柳下教学上人が出て来られ、

「遠慮なく……」

と快諾された。

ホツとして旅装をとき、風呂を頂いて汗と垢を落した。行脚中、一番有難いと思うのは風呂である。

その夜も遅くまで上人を困んで色々有意義な話を伺った。面白かったことは、国土防衛問題のことだった。

上人は言われた。

「日本から、よその国に戦争をしかけることはなかるうが、若し、よその

国から戦争をしかけられたり、全面戦争の中に巻き込まれたとした場合、現在の日本の防衛体制では、三日間しか戦闘能力はない」

この言葉は、深く我々の肺腑をさした。我々は、あまりにも社会状況や国家状況、引いては国際状況にも、うとんじすぎている。

「餅屋は餅屋」

というけれど、大聖人の立正安国の獅子吼は、蒙古襲来という恐るべき未曾有の大国難、この現実の依って来った根本原因と、その後の動向をみ

きわめた上、軍備拡張でもなければ、外交政策云云でもなく、「汝、早く信仰の寸心を改めて、速かに実乗の一善に帰せよ」という国家諫暁だったのである。国家・世界の現実、そしてその前後をもみきわめずして、如何に信仰を鼓吹しても、所詮、現実より遊離した宗教となり、社会を救うには、

ほど遠いものとならざるを得ないだろう。

このたびの身延・池上間の行脚の目的の一つには、蒙古襲来という大国難の後に来る国家状況の変動をみきわめ、未来に

対する正法宣布の対策を
具体化せんとする大聖人
の、その心底にふれよう
と期するところがあつた
のではないかと思つた時、
これまで、

―疲れた足が痛い。もう
歩けない―

―今夜の宿は、どうしよ
うか。泊めてくれるとこ
ろがあればいゝが―

と、自分の肉体ばかり
に心が傾いていたことが、
懺悔に堪えなかつた。

八月四日 晴

今日は最終コース、最
後の行脚である。昨夜の

反省を、もう一度心にか
みしめ、仏天に祈り、大
聖人に詫びながら、大音
声にお題目を唱えて、一
路池上へ向つた。

藪根、星谷、勝田町、

大柵町、東山田町、野川、

千年という町々を通り、

南武線の鉄道を越え、小

杉町に入つて多摩川の丸

子の渡し―についたのは

午前十時。

人間の決心というもの

は恐しいもので、こゝま

で一気に歩いていた。

弘安五年九月十八日、

大聖人の一行が「丸子の

渡し―についた時、池上

左衛門ノ太夫宗仲・宗長

の兄弟をはじめ、四条金
吾・荏原義宗等々鎌倉一
円の檀越たちが、急報に
よつて出迎えていたであ
らうという。

九ヶ年の間、身延の山

中、一步も出ずに国難を

祈つておられた大聖人が、

国難後はじめて山を下つ

て関東へ来られるとあれ

ば、急使をうけた関東の

弟子・檀越たちが武蔵の

国と相模の国の国ざかい、

この「丸子の渡し―」の河

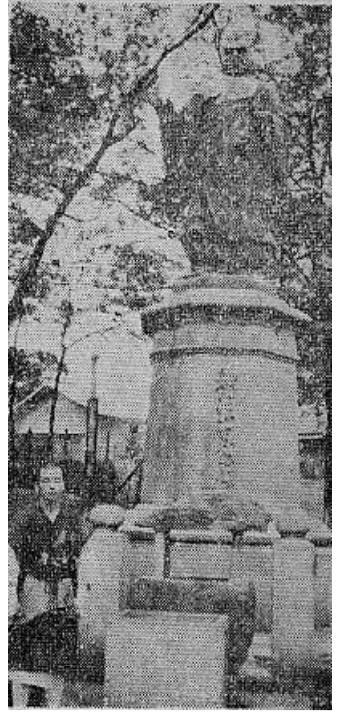
原に、土下座・合掌して

出迎えていたことである

うとは、容易に想像され

よう。

当時、この渡しは舟で



洗足池日蓮大聖人銅像

渡った。今は丸子橋という大橋がかゝっている。

我々は、橋を渡って洗足池へ向った。到着したのは午前十一時。池の淵には大聖人の大銅像が立っていた。

仰ぎみる大聖人の尊容……それは御入滅を三週間後にひかえた大聖人が、はいたワラジをふみしめて、国の行くすえ、人類

の行くすえを憂い見護らんとする、慈悲と威厳にみちていた。

銅像の台座には「知法思国」

という大聖人のお言葉が、海軍元師東郷平八郎の健筆によつて刻み込まれていた。

伝えるところによれば、大聖人が馬から降りて暫し、この池の淵で休息さ

れ、足を洗われたことから、洗足という地名が起きて来たのだという。またこの池は古来一度もかれたことがないという。

こゝからは、池の水面を通して対岸の、妙福寺の瓦と、これをおゝう大聖人袈裟掛の松とが望まれたが、湖上ボートに遊ぶ者、湖畔に散歩する人々は多くても、この銅像をおがむ者は一人もいなかった。悲しみと怒りに似た思いをしながら、銅像の下で弁当を使い、午前十一時三十分洗足池を出發。更に大音声のお題目を張りあげて、池上本

門寺へと南下した。

伝えるところによれば、

大聖人が池上宗仲の館に到着されたのは九月十八日の午の刻、今の午後一時であつたという。

奇しくも我々一行が、

宗仲の館趾である大坊の前に立つのは、月日こそ違え、同じ一時のことだつた。こゝ大坊には、大聖人御入滅の居間がある。居間の中央には、大聖人が病軀をよりかけながら、立正安国論を最後の説法として説かれたという大黒柱が、昔のまゝ黒光りに光つて安置されていた。

我々は、その前にひれ

伏した。頭はあげられなかつた。

「只今……身延山から只今……到着いたしました」
と心で報告し、同時に唱えるお題目の声もわなゝいていた。

その後、大聖人の茶毘塔に参拝し、坂を登つて本門寺の、新築したばかりの、見あげるような大本堂の前に到つた時、佐々木妙定法尼とその信徒の一行が、手に手に太鼓をうつて、我々を出迎えていた。それは我々の行脚の、最後の一步を飾る天鼓であつた。

一緒に本堂へ上り、国

宝大聖人の尊像の御開扉をして頂き、直ちに身延山の法主猊下をはじめ、道中お世話になつた各寺院・各信徒の家々に対して、無事到着を知らせる感謝の電報を打つた。

その夜は、本門寺の特別の計らいで、客殿の一隅に旅装をといいたが、三人とも真黒に日焼けした上目はくぼみ、頬はこけ落ちて、着ていた衣も袈裟も、白衣も手甲・脚絆も、汗と埃で、まるで醬油に煮しめたようになつていた。

思えば七月二十六日身延山を発足してより八月

四日の今日の日まで丸十日間、本妙庵の学生僧が三人、互に兄となり弟となり、励ましあい助けあいながら、歩きに歩き通して来たが、今こゝに無事到着を喜びあうよりも寧ろ、長い道中、多くの人々の情けをうけながら、その時その場で、これに心じるほどの説法の一つも出来なかつた身の未熟さ・青臭さが反省され床についても却つて、目は冴えるばかりであつた。

大聖人は池上宗仲の館において最後の説法として立正安国論を講ぜられてより、十月十三日の御入滅に先き立つて、年十四才になる経一曆(後の龍華日像上人)に対して、京都開教を付囑されると共に、御自身の墓を身延山に建ててゐることを固く御遺言されている。

それは大聖人が、国難後における国家状況の大変動の胚胎している恐るべき国家の乱運を察知されそれを御自身の、足で確かめ肌にも感じて、未法万年広宣流布の法灯をかゝぐべく、あえて病軀をおしてまでも、身延山から池上まで進まれた、その間の内観的結論であつたといえよう。

いな、こうした大聖人の内観とその準備は、弘安四年の夏、蒙古の第二の襲来の去つた直後、十間四面の身延山久遠寺建立をされる時から、既に始まつていたともいわれよう。

従つて大聖人の御入滅が、たとえ池上でなかつたとしても、
たとい、いづくにて死に候とも、九ヶ年の間、心安く法華経を誦誦し奉り候山なれば、墓をば身延山に立てさせ給え。未来際までも心は身延山に住むべく候。
日蓮が弟子檀那等は、

この山を本として参るべし。これ則ち靈山の契りなり。

という結論には、変りはなかつたと言えるのである。

大聖人は骨を身延山に留め、身延山中より、末法万年の国の行く末、人類の行く末を見護ろうとされた。と同時に国家政権の、鎌倉より京都へ移ることを予期されて経一磨に京都開教を付嘱された。

我々は、その身延山より付嘱の地池上に来つた。そしてこゝで我々は何の付嘱を受けたのか。と思

つて自分自身をふりかえつてみれば、高邁なるものは何一つなく、行脚中、心暖く迎えてくれた世の人々に対する限りなき感謝と、身の未熟を恥じる深い懺悔……そういう小さな平凡なことばかりであつた。



~~~~~

本小冊子は昭和三、四十年代活躍した鷲峰会の当時学生であつた小林・渡辺・仲三師の身延から池上への撃鼓行脚の偉業を讃え、又日蓮大聖人の身延出山の真意を尋ねての实地踏査の紀行文は他に例を見ない貴重な文献として有縁の方々へ配布したく『鷲峰』26号掲載分を復刻したものです。写真不鮮明は御諒解下さい。

~~~~~

平成十七年十一月二十八日

町 行象記